

塩谷昌史著 『ロシア綿業発展の契機——ロシア更紗とアジア商人——』

岩 本 真 一

一 本書の概要

本書は一九世紀前半ロシアの綿織布業（特に chinis Ⅱ更紗）と捺染業の発展を軸に、生産、流通、消費の過程を捉えた研究書である。

第一部「モノ研究」には「序章 視角と方法」が当てられ、民俗学から着想を得たモノ研究の重要性が述べられる。経済統計だけでなく非文字資料（写真、絵画、現物）などのモノに注視することで跨境史が必要とされ、地理的視野はロシアを超え、対アジア貿易や露英輸出競争へと広がる。連続説にもとづいた時間的視野も長大で、一九世紀ロシア

経済史を工業化の観点から一貫して捉える。流通的視野は綿織物の種類と消費（衣服その他）へと広がり、一層具体的に研究を掘り下げていく。

本論は、第二部（生産）、第三部（流通）、第四部（消費）に分かれている。

（一）更紗の生産

第二部「更紗の生産」では、棉花生産が難しいロシアでの綿工業の展開と輸出化、および染色業の発展を取り上げる。

①第一章「ロシア綿工業の発展とアジア向け綿織物輸出」

本章によると、アジア製綿糸輸入を起点に一七世紀のアストラハンで最初の綿工業が勃興し、一八世紀半ばからヴォルガ川沿岸の綿工業地域が形成され、一九世紀初頭に中央工業地域（モスクワ県・ウラジミール県）で綿織物業と捺染業が発展した。

一九世紀前半ロシアの国内綿布消費市場は未発達であった分、ロシア製綿織物は輸出志向を強めた。一九世紀前半ロシアの外国貿易に占めるアジア貿易の割合は一〇%程度であったが、ロシア製綿織物を輸入した唯一の地域がアジアであった。このアジア市場をペルシア・オスマン帝国、中央アジア、清国の三地域に区分し、中央アジアが一九世紀前半の最も安定した綿織物輸出先であったと貿易統計から導出されている（次いで清国）。

一九世紀初頭にインドを植民地とした英国がカシミールやカブール経由で中央アジアへ綿織物輸出を開始した。当初はインド、アフガニスタンから山脈を経た流通コストによってロシア製綿織物は守られていたが、一八四〇年代以降、モスリンは「品質の点で英国製品と競合できず」（五八頁）に打撃を受け、結果的にロシアはモスリン販売市場を喪失した。他方、更紗は輸出規模を維持した。

②第二章「ウラジミール県（イヴァノヴォ）における更紗生産の発展―染色工程が牽引する工業化」

本章ではロシア染色業の展開を述べている。

同県周辺は「黄金の環」とよばれる教会密集地域であり、ロシア正教会の関係からイコン画制作が盛んで、着色技法の共通性から麻織物・綿織物へと応用された。一八世紀初頭にロシア政府はドイツから染色技術者をサンクト・ペテルブルクへ誘致し、世紀半ばにはウラジミール県の染色業者たちが訪問した。ロシア内でドイツ染色技術が開放されるなか、ペテルブルクの業者たちは欧州志向、ウラジミール県の業者たちはアジア志向へ向かい区別化を図った。

さらに染色業を促進させたのが、ナポレオンによる大陸封鎖（一八〇八―一二年）、一二年のモスクワ進行、二五年の欧州経済危機である。これにより、ロシア国内および欧州からの染色業者の流入がウラジミール県に向けて始まった。その結果、染色に必要な濃硫酸や媒染剤などの普及が加速し、地元や県外の定期市からウラジミール県へ綿糸、油化製品、化学製品、インディゴ、茜、硫酸などの綿織物染織原料が運ばれた。なかには染色工場に紡績工場と織物工場を併設する企業家が出現した（三部門結合工場）。

染色業発展前後から密接になっていったロシア・中央アジア関係を「工業化によりロシアは、中央アジア商品の輸入代替を実現し（中略）、ヨーロッパが工業化により、アジア商品を輸入代替した構図と相似」（九四頁）すると導出される。

（2）更紗の流通

第三部は「更紗の流通」で、ニジェゴロド定期市を起点に中央アジア・清国との貿易網を論じている。

①第三章「ニジェゴロド定期市における綿織物の取引」
本章はロシア最大の定期市であった同定期市を取り上げ、取引商品および綿織物の占める比重を考察する。第二部がロシア北西部地域の対中央アジア貿易の発展という角度であったのに対し、本章は同定期市を通じた外国貿易志向から国内市場志向への転換に注目した。この転換の要因として挙げられるのは一八四〇年頃の国内更紗市場の拡大と対ペルシア貿易の減退である。

ニジェゴロド定期市は国際商業都市で、欧州、アジアの各地から多数の商人が集まっていた。特にロシア・アジア貿易で重要となるアルメニア商人とブハラ商人が関与して

おり、これによって対ペルシア貿易、対中央アジア貿易が維持されていた。^①一九世紀中期にかけて同定期市の取引内容は、ロシア商品が欧州商品・アジア商品より抜きんでていく様が出荷額ベースでグラフ化されている。このグラフはロシア商品の内訳へ、さらに織物商品の内訳へと焦点が絞られ（グラフ3-2、3-4）、ロシア商品の最大額を誇ったのが織物であり、また綿織物であった点が明確に理解できる。

さらに、綿織物の生産地域別（ロシア製、欧州製、アジア製）に区分し、その違いを検討する。ロシア製綿織物のキタイカや南京木綿が毛織物製品の普及によって取引規模を縮小し、後にはキャラコ、綿ピロッド、モスリンが規模を大きくした。欧州製綿織物では、更紗・モスリンをはじめ、従来のロシア服飾大系に無いチュール、ストッキング、ピケなども取引された。ここに著者は欧州製品を「モードの女性用服飾に使用された」（二二六頁）と特徴づける。アジア製綿織物は中央アジア経由を含み、更紗、キャラコ、ブルメタなどの他に、ターバン、ハラートなどのイスラム教徒用衣料が多かった。同定期市をつうじたロシア製更紗の輸出が小さいのは既述の国内更紗市場の拡大が背景と

なつたのであろう。

②第四章「アジア商人の商業ネットワークとロシアの綿織物輸出」

本章は、これまで著者が描いてきたロシア、ペルシア、中央アジアの綿織物貿易を清国にまで拡大したものである。本章の関心は「ロシア国内でロシア製綿織物が、どのように運ばれたか、ロシア国境を越えた後、いかなる商人が、どのような流通網で、綿織物を輸送したか」（二三三頁）に向けられる。

対ペルシア貿易ではアルメニア人が活躍した。一九世紀のロシア・ペルシア貿易でロシア国内の流通拠点はいティフリ、ペルシア国内の拠点は国際的貿易都市タブリーズであった。ペルシア市場では、イスタンブルから欧州製更紗を輸出しようとするペルシア商人と、ティフリからロシア製更紗を輸出しようとするアルメニア商人の思惑がぶつかり、ロシア製更紗は減少していった。その後、アルメニア商人は欧州製更紗の輸入に注力する。一八四〇年代末の蒸気船登場により、英国マンチェスターとイスタンブルが海路で結ばれることでロシア国籍ギリシア商人が英国からペルシアへ英国製更紗の輸出を開始した。その結果、陸路

を中心とするアルメニア商人と海路を軸とするギリシア商人間で棲み分けが生じ、対ペルシア貿易はアルメニア商人によって継続的に進められた。

ロシア・中央アジア貿易ではブハラ商人が活躍した。ブハラは長期にわたりユーラシア交通の要衝として機能してきた。

一八世紀にはロシア国境内にブハラ商人が積極的に出入した。ロシア政府が外国商人に対する国内取引規制に彼らを例外としたため、ブハラ商人は、トボリスクや、カザンとイルギスのほぼ中間に位置するオレンブルクまで進出した。

一九世紀初頭までロシアは中央アジアへ毛皮を輸出したが、世紀前半の初期工業化をつうじ、綿織物輸出（更紗やモスリン）へ転換した。既述のとおり、ペルシア、中央アジア、清国のなかで、中央アジアは最も安定した輸出先であった。ブハラ商人は中央アジアの消費者の嗜好やデザイン情報を集め、ウラジーミル県の織物業者へ伝えたという。中央アジアへの綿織物輸出の拡大とともに、ロシアは中央アジアから綿織物の原材料として棉花と染料（コチニールや茜）を輸入するが、輸入超過によって対中央アジア貿

易は赤字へと転落する（米国綿花の輸入も増加）。しかし、両地域の関係は密接であり続けた。そもそも、中央アジア棉花はロシア内の紡績機械に適合せず、米国独立戦争時に米国棉花の輸入が途絶えたロシアは、中央アジアに米国棉花の移植を促進させ、棉花供給基地としての機能を担わせたのである。

本章の最後に、シベリア商人と山西商人に担われた露清貿易が述べられる。露清貿易の端緒は一七二七年のキャフタ条約で、バーター貿易の形をとり、バーター基準は綿織物（キタイカ）であった。

一七三〇年に清朝商人がキャフタ川左岸の清朝領内に移住し、買売城という貿易都市を建設して在庫街とした。買売城とキャフタを往復し、両都市は露清貿易の拠点となった。従来のカラバン貿易は一七五五年に廃止され、以降の露清貿易拡大にもなってキャフタと買売城は世帯数を増加させた。買売城で山西商人が勢力を拡大していくのは一七九二年以後、同商人が買売城に自身の店舗を構えはじめてからのことである。

ロシアから清朝への輸出品は一八世紀では特に北部を対象とした毛皮で、ロシア製、欧州製、中央アジア製のさま

ざまな毛皮が清朝へ輸出された。ロシア初期工業化以後は、清朝へロシア製綿織物、特に更紗と南京木綿が輸出されるようになる（三〇年代以降は綿ビロードの比重が増加）。以後、一八五八年の天津条約、六二年の陸路通商協定によってロシア商人は清朝内の流通網に直接参入するようになり、従来の貿易ルートは変更された。

（3）更紗の消費

第四部は「更紗の消費」で、ロシア製綿織物のアジア市場における位置と、一九世紀服飾文化の影響を論じている。

①第五章「アジア綿織物市場におけるロシア製品の位置」本章ではロシア内外の消費者がロシア製綿織物をどのように受容し、服飾文化を変化させていったかを検討している。本章の核心は、川勝平太や沢井実の観点を参照し、綿織物の輸出先によって製品が異なっていた点に注目した点にある（同一製品の複数市場）。

本章で著者はアジア綿織物市場を、タブリーズ（ペルシア）、ブハラ（中央アジア）、キャフタ（清国）の三地域に分ける。まず、タブリーズでは従来から英露競争に研究関心が偏向していた点に注意を促し、ペルシア棉花を起点と

した綿織物生産が地元で確立していた事実と、「長期にわたりインド製綿織物が輸入されてきた歴史」（一六八頁）を確認し、ロシア製、英国製、ペルシア製、インド製の競合としてとらえ直す。

タブリーズ市場で取引されたのは特に更紗とキャラコで、更紗市場は一九世紀初頭まで全面的にインドに依存していたが、その模倣として国内生産が開始され、インド製に比して低品質・低価格によって一定の販路を見出した。ロシアと英国が同市場に輸出を始めたのは一八二〇年代前半のことで、英国製はインド製とデザインが酷似していたため印英製が競合関係に入った。

当初、インド製より低価格であったが色落ちの欠陥を有した英国製は衣服の裏地に利用され、ペルシア製品との競合においては捺染技術で上をいく英国製が富裕層向けにシエアを拡大した。四〇年代に色落ち問題を解消した英国製はさらにシエアを伸ばし、更紗市場を支配していく。ロシア製は三〇年代に輸出が試みられたが、デザイン企画において競争力をもてずに撤退し、辛うじて色落ちのない緑色更紗のみが一定の販売を維持した。

次いでキャラコ市場では一八二〇年代前半までペルシア

産（つまり国産）のみが販売されていたようで、二七年に英国から米綿原料のキャラコ「アメリカン」が輸入され、捺染後に衣服やテントとして販売されるようになる。英国製はペルシア製より低価格でシエアを伸ばした。ロシア製は一八三〇年以降に輸出が試みられたが、四〇年代前半まで英国綿糸に依存していたロシア製は価格競争力で英国製に劣った。

このように、タブリーズ市場では英国製が大きなシエアを誇ったが、これを支えたのが欧州陸路を活用したアルメニア商人で、ライプツィヒ定期市での買い付けを行なった。一八四〇年代後半からは英国がイスタンブルを経由してペルシアへ輸出するルートが加わり、このルートには既述のギリシア商人が介在するようになった。

ロシア製のデザイン競争力はタブリーズ市場で劣っていたが、ブハラ市場では趣が異なった。

中央アジアではブハラ、ヒヴァ、サマルカンドなどで棉花が栽培され、粗織りキャラコ、更紗、縞木綿、ペールなどの綿織物生産が盛んで、ロシアを含む周辺諸地域へ輸出もされた。ブハラ市場へロシア製が浸透したのは一八三〇年代前半のことで、ブハラ製との競合は確認できず、著者

はロシア製が二倍以上だという価格差に注目し、ロシア製（更紗、亜麻交織の白木綿、キャラコ、モスリン）が富裕層の購入する奢侈品だったと洞察する。ロシア更紗は部屋着の裏地や女性用下着に利用され、白木綿とキャラコは富裕層の下着生地、モスリンは高官のターバンに利用された。これらのロシア製はほとんどがウラジーミル県産で、ポシーリン工場製が特に著名であった。

ブハラ製とロシア製が棲み分けしていたブハラ市場に英国製が参入してきたのは一八四〇年代初頭のことである。

英国製は低価格で、更紗、白木綿、モスリンなどが多く占め、ロシア製と競合するかのようであった。実際、一時期はロシア製が低迷したが、英国製には織物の長さの測定基準の違いや、仕立にくさ、更紗の色彩の不鮮明さ、編糸に綿糸を固定させていないなどの不満が多く、他方で、ポシーリン工場をはじめとするロシア製は消費者嗜好をつかまえ、結局のところロシア製が優勢になった。

キャフタ市場における露清貿易に移る。従来は清国製綿織物がロシアへ輸出され、一八世紀には清国からの輸入総額の約六割を綿織物が占めたという。その後、キャフタ市場の転換によってロシア製綿織物が増加し、またトラン

ジット商品として英国製も清国へ輸出された。一九世紀前半のキャフタ市場には、清国製、ロシア製、英国製が併存した。

キャフタ市場の清国製綿織物にはキタイカ（平織青色）、ダバ（赤や青に染色された更紗風粗布）があり、対露輸出ではキタイカが九割、ダバが一割を占めた。ロシア製綿織物には更紗、キャラコ、亜麻交織の白木綿、南京木綿などがあり、特に更紗と南京木綿が、清国内陸部の消費者に好まれた。三〇年代になるとモスクワ製綿ビロードが比重を増し、キャフタ市場で英国製と競合した。

英国は清国へ綿織物を輸出した最初の国であった。その主たる品目が綿ビロードで、陸路では更紗や南京木綿などを、海路では長布、白木綿、布製家庭用品などを清国へ輸出していた。これら英国製のうち、三〇年代からのロシア製の対清輸出によって打撃を受けたのが綿ビロードである。ロシアの企業家が清国側の要求と嗜好を把握し、それに見合った製品開発を行ない、また価格低下を実現させた点に、著者はロシア製優位の要因を求めている。また、綿ビロードに関しては清国側の尺度に沿った寸法で供給した点も挙げられている。

以上、ロシア製綿織物の輸出は主に中央アジアと清国において成功をおさめた。

②第六章「ロシア製綿織物と服飾文化の変容」

一九世紀後半から中央アジアの農民衣料は自家製麻織物から既成綿織物へ変化した。このことを扱ったのが本章である。ロシアは一六世紀からアジア製綿織物を輸入してきたが、この間、中央アジア製の赤更紗「クマーチの赤」(二二頁)への憧憬が形成されていた。

一九世紀前半のロシア初期工業化によって赤更紗の国産が実現し、赤更紗や更紗などの既製綿織物がロシア北部へ、同世紀後半には南部へ普及した。この間、ロシアは中央アジアへ赤更紗を輸出するようにもなった。赤更紗は中央アジアの農民・遊牧民になじみ深い色であった。

最後に、第五部は結論として終章「ロシア更紗とアジア商人―近代の始まり―」が論じられている。これについては次節で検討したい。

二 本書の批評

(1) 終章に対する批評

さて、第五部終章の主な論点は、遠隔地貿易が一五世紀

末にリレー式貿易から無寄港貿易へと転換した点(Ⅰ「遠隔地貿易の転換」、自然環境の克服と赤更紗への憧憬によるロシア初期工業化、および一九世紀前半を近代の開始とみる点(Ⅲ)である。

遠隔地貿易の転換で強調されているのが、オランダによる複数商業圏を統括する貿易システムの構築で、大西洋貿易とアジア貿易の情報・商品管理によって膨大な貿易手数料収入を実現させた点である。この要約は明確であるが、続くⅡ「ロシアの初期工業化」で述べられているロシア貿易のあり方とオランダの貿易システムとの関係は不明瞭である。ロシアの陸路貿易とオランダ型貿易システムとを簡単にでも比較して良かったのではないか。また、露英輸出競争を論じるさいにも海路貿易との比較は避けられない。

ロシアが一九世紀後半以降に海路貿易へ積極的に踏み込む展望も添えてほしい(実際にそうならば)。そうすることで、キャプタ貿易から開港地貿易への転換という新たな露清貿易の形成をも想起しやすい。

ただし、初期工業化を遂げて以来、一九世紀後半のロシアが「ヨーロッパの遠隔地貿易システムへの依存から離れ、ロシア帝国内で完結する閉鎖経済を指向する」(二三〇頁)

との指摘から考えると、それ以後の工業化はロシア帝国領域を維持することで進められたのかと推察され、評者の批判は的を射ていないかもしれない。他方、第三章で述べられた一八六一年の広東港開港や、その後のロシア内鉄道網拡大をどのように閉鎖経済化と関連づけるかを知りたい。

また、初期工業化と近代化の關係が明記されておらず、Ⅲは近代の始まりではなく工業化の始まりに留めて良かつたのではないか。

次に、赤更紗への憧憬とロシア初期工業化の關係について、英国のインド更紗への憧憬によって模倣産業化に成功したことに重ねて対照的に述べられている。ロシア製綿織物がペルシアで失敗し、中央アジアで成功した原因の説明としての確であり、経路依存を手がかりとして経済史とメソ⁽²⁾タリテイとを上手く接続した点で高く評価できる。

(2) 全体に対する批評

① 陸路貿易

近代欧州および日本の海路貿易になじんだ評者にとって、本書は陸路貿易に独自の躍動感が存在することを教えてくれた。

たとえば、ブハラ商人は秋から春にかけてラクダを用いてキャラバン隊を編成し、大規模な場合は五〇〇〇頭のラクダを引き連れたそうである。時速約三・五kmで一日一五時間進むという仮定で、各地への到達日数を試算している点が丁寧である。俄かには想像しにくい陸路貿易の具体的日数が想像できるため、この辺りの叙述は非常に興味深い(二四七頁)。

少しお願いをすると、本書を追うごとに陸路貿易の具体像が深まったが、その具体性(キャラバン体制、移動日数、危険度など)をどこか一か所にまとめてほしい。また、目次ixの次頁の地図「アジア商人の商業ネットワーク」に英国製綿織物の貿易ルートを記してほしい。英国・中央アジア間の綿織物貿易にロシア政府が介在し、貿易ルートが変更されたとのくだり(一四〇〜一四二頁)は、中央アジアにおける露英競争が躍動感をもって叙述されているだけに、読者としては地図で再認したくなる。

② 連続説によるロシア工業化

これは序章Ⅲで述べられている。通例、経済史は綿工業の進展によって工業化や産業革命が論じられるから、本書によって一八七〇年代・八〇年代のロシア工業化という通

説は相対化され、一八二〇年代から八〇年代頃にかけて工業化が進展したとの修正が迫られるべきである。このような意味で本書は遅れたロシア経済像を相対化できたといえる。

とはいえ、一九世紀後半の重工業化に同世紀前半の軽工業化を加えただけではないかという否定的見解も評者はもつてしまう。

確かに農奴解放（一八六〇年）からロシア革命（一九一七年）までを資本主義段階としてきたソ連型ロシア経済史観を乗り越えるには、農奴解放以前の資本主義段階を探り出すことは必要である。そのために断絶説ではなく連続説が採用される点は理解できるし、実際、本書全体に説得性がある。しかし、ひとたび一九世紀全体を工業化段階にあつたと規定した場合、前世紀との連続性は何によつて保証されるのか。工業化を扱うこと自体が断絶説に基づいていのではないか。序章は、著者がソ連崩壊という政治的断絶を乗り越えようとする一方で、一九世紀前半の経済的断絶を軽視していると感じられる。

③ 西洋中心史観の相対化

他方、経済的断絶の軽視に関わり、もう一つの意図で

あつた西洋中心史観（本書では西欧中心史観）の相対化も決着していないように思われる。^③確かに中央アジアからの英国製更紗の撤退をふまえれば相対化は成功しているが、染色技術の導入は西洋牽引的であつた。

とはいえ、玉木俊明氏が述べるような「化学工業や鉄工業までを含めた工業化が、果たしてアジアの商品の輸入代替化といえるのであろうか」と評者は疑問視しない。産業革命論や工業化論に重化学工業化を必須とする観点自体が西洋（または英国）中心史観である。

問題はむしろ、本書の随所で述べられたロシア製綿織物の市場拡大に必ず付随する露英競争にある。更紗に関してはペルシアで英国勝利、中央アジアでロシア勝利となり、露英輸出競争の勝敗は一勝一敗である（清国は露英混在）。近年の経済史研究は英国過小評価の勢いが止まらない。

しかし、個別の商品ごとに輸出勝敗は異なるにしても、英国製綿織物が世界と戦つた事実と大きさが、本書および参考文献群のように英国相対化をめざす夥しい量の研究増加とともに確認されていくという逆説的な結果になつており、本書もその逆説から自由になつていいるとは言い難い。

本書を通じて、英国製綿織物輸出の世界的規模を再認識

ざるをえない。

また、西洋の相対化を目指すあまり、ロシア製綿織物の中央アジア輸出という事態は肯定的に捉え過ぎている感がある。これに関わり、第六章で述べられた一九世紀後半の中央アジアの農民衣料の転換、すなわち、自家製麻織物から既成綿織物への変化は、これまで批判にさらされてきた英国製品の全面的浸透を否定する一方で、ロシア製品の浸透については長期間にわたるロシア・中央アジア関係の経路依存を踏まえて、『それで良し』と結ばれた感が強い。

この点に、ロシア中心主義を読み取れる。西洋の工業化によってロシアの後発資本主義化（工業化）が促進されたことは本書でも認めてはいるのだが（特に第二章の染色業）。

経済史研究で西洋中心史観の相対化が本場に必要なのかどうか、再検討する余地は残っている。

④モノ研究

非常に広範かつ錯綜した綿織物貿易を扱いながら、赤更紗の輸入代替にロシア初期工業化の筋道を見出した点に感服する。その意味でモノ研究は成功している。⁽⁵⁾ 更紗または赤更紗の取り上げられ方を意識して全体を読めば、本書の醍醐味は深く押し出されるであろう。

本書口絵に掲げられた赤更紗の衣類群は、歴史的憧憬という形でロシアの綿織物業を突き動かしたと同時に、塩谷氏の研究生活をも突き動かしたのだと評者は確信している。

- (1) 対清貿易は一七二七年のキャフタ条約の縛りがあり清国商人の来市はなかったが、シベリア商人が介在することで清国商人との交流が可能であった（一〇五頁）。
- (2) 高田和夫は誰のメンタリテイなのかと疑問視している（高田和夫『書評』塩谷昌史著『ロシア綿業発展の契機―ロシア更紗とアジア商人―』『東北アジア研究』第一九号、二〇一五年、一五四―一五五頁）。確かに文献から裏づけをとっているわけではない。しかし、三世紀にわたる長期輸入を考慮すれば、企業家・技術者などの生産者から農民・遊牧民などの消費者にわたり、ロシアの人々が赤更紗を憧憬したであろう点は推察できる。
- (3) 高田和夫は西欧とアジア、ロシアと中央アジアという構図を本書から読み取り、相互の関係において大きな段差があると指摘している（高田、一五〇―一五一頁）。
- (4) 玉木俊明『書評』『ロシア綿業発展の契機―ロシア更紗とアジア商人―』（『比較経済体制研究』第二一号、二〇一五年三月、一一三頁）。
- (5) 民族学と民俗学の差異に関する玉木俊明の指摘には同感する（玉木、一一六頁）。

塩谷昌史著『ロシア綿業発展の契機―ロシア更紗とアジア商人―』（知泉書館、二〇一四年二月刊、A5判、ix＋二七三頁、本体価格四、五〇〇円）

（いわもと しんいち・大阪経済大学日本経済史研究所研究員

同大学他非常勤講師）